

9月のテーマは「近代思想の問題点」あるいは「近代化という世界現象の問題点」。この問題は、これまでの講義から必然的に出てきたもので、受講生の方からの要望にも添うものです。予定として、以下に示すように、まずこれまでの話の流れを整理し、問題の原点である「啓蒙」ということを再検討し、これまでに世界史の中で見られた「啓蒙」に対する批判を整理し、最後に私なりの結論、すなわち「今後私たちはどういう方向に行くのがよいのか」ということについてお話したいと思います。盛沢山の内容で、しかも受講生の方々の忌憚ない御意見を多く伺いたいで、あるいは時間が足りないかも知れませんが、そうなれば、続きはまた別の日に。どうぞよろしく。

1 問題点の整理

- * 日本の伝統的発想（二刀流、神仏習合）には可能性がある。
（佐治先生（注1）のお話にもあったように、価値観を相対的に見ることのできる日本人は世界平和に貢献できるし、その発想は宇宙論的にも「自然」なものであると言えます。
（注1）第3回からつ塾講師、佐治晴夫先生
- * にもかかわらず、日本はなぜ近代化せねばならなかったかという疑問が残ります。これは何も日本だけの問題ではなく、世界中に多くの「未開発」の集団がありますが、彼らの伝統がいかに素晴らしくとも、彼らは外からの圧力だけでなく、内からの願望もあって、近代化を進めていくのです。
- * では、日本の近代化は成功したのかというと、ある程度の成功はしたというものの、その破綻が一連の近代戦争になってあらわれ、一つの文化的財産が失われたのです。福沢諭吉も言ったように、小さな共同体のなかで暮らしてきた日本人には独立自尊の気風が乏しかったので、彼は近代化によって独立自尊の気風を育成せねばならないと考えましたが、それが実現しなかったのです。
- * すなわち、日本の近代化は精神面では成功していないということです。戦前は「富国強兵」に傾いて、独立自尊の気風を育てるかわりに国家主義・天皇主義に身を任せ、戦後もまた敗戦による自信喪失からアメリカ型自由主義を無批判に取り入れているのであって、表面的な近代化しかしていないと言うべきでしょう。吉田先生（注2）がせっかく取り入れた小学校における「アニマル・セラピー」（馬を子供たちに育てさせ、日常接することで、子供たちに愛情と畏敬の念を育成するとともに、コミュニケーション能力の増大も図る）がスケジュール重視の悪習にはまった官僚的な教育組織のなかでは効果を発揮できないという身近な実例は、教員や組織にたずさわる人間がいかに「近代化」（＝啓蒙）されていないかを示しています。近代精神とは自立であり、自律であり、自分で物事を判断できるということにかかっているわけですから。
（注2）吉田孚（まこと）さん。元小学校教員。からつ塾発起人。
- * ここで疑問が生じます。日本の近代化が福沢諭吉の近代化路線を実現していないとするなら、そしてそれによって精神的な面での近代化が達成されていないのだとすれば、福沢自身の発想そのものは問題がなかったのでしょうか？必ずしもそうとは言えないと思います。なぜなら、福沢の路線は伝統の美質を破壊する面を持ち、その美質を破壊した場合、かりに近代精

神を勝ちえたとしても、日本人の精神はやはり荒廃したからです。たとえば、福沢は蘭学で育った人間で、動物実験は何の抵抗もなくやりましたが、そうした彼のドライさは現代の医学に通じる冷たさを持ち、彼の「学問ノスゝメ」の人間中心主義は、近代になっても抵抗を感じる日本人がいたわけで、たとえば泉鏡花という作家の作品にはそうした明治の啓蒙思想家への批判が現れています。

- * では、それなら伝統に回帰すべきなのでしょう？また、それは可能でしょうか？これについて言えることは、まず伝統に回帰することは出来ないということです。しかし、伝統を自覚し、それを時代に合った形で表現し、それによって近代化の歪みを修正する道は残されていると思います。すなわち、一方で十分達成されていない近代精神 = 啓蒙精神を実現し、他方その欠ける点を意図的に伝統の美質によって補う。こういう方向に進むことは可能なのではないかと思うのです。

2 「近代精神 = 啓蒙」とはなにか

- * 以上のような考えはすでに前回にも大ざっぱに述べたのですが、藤原さん（注3）などこの問題に関心がおありだったので、それをさらに深めようと思い、そもそも近代精神とは何なのか、なぜ近代化は必要なのかという根本問題を今回はじっくり掘り下げたいと思います。（注3）藤原雄さん。からつ塾生。
- * まず、近代思想の中核である啓蒙の精神は基本的に合理主義です。理性を重んじ、信仰を第一義にかかげないのが近代人の特徴です。そういう発想は西洋にばかりあったのではなく、日本人が西洋人を知る前からすでに日本にはありました。18世紀の新井白石は「神は人なり」（「古史通」1728）と言っているのであり、「古事記」などに出てくる神話は人間が作った物語で、史実ではないと主張したのです。「神」とはすなわち人間の理念の具体化にすぎない、つまりは「人」であるという主張です。
- * 西洋の合理主義は理知にもとづいてすべてを判断する姿勢にあらわれますが、その端的な例はデカルトです。彼は「人は常識において平等であるが、その運用に巧拙がある」といい、「常識の正しい運用のために、私はまずすべてを疑うことから始めた」（「方法序説」1637）と言っていますが、この懐疑の精神こそは合理主義と表裏一体です。もっとも、似たような精神は江戸時代の学者にも見られ、たとえば大分の人である三浦梅園は次のように言っています。

「水はなぜ冷たいのか。陰だからだというのが、どうして陰のものは冷たいのか。

こうして私は子供の頃すべてを疑ってみたものです。」（「玄語」1788）

梅園の言葉は、当時の日本では中国の陰陽思想が支配的で、なにごとを説明するにも陰と陽の原理が用いられていたことを示しています。梅園はその原理そのものを疑ってみたわけなのです。ここには徹底した合理主義が見られます。

- * 近代の啓蒙精神を特徴づける最大のものは相対主義でしょう。自分の立場はあるけれど、それをひたすら主張するのではなく、他の人の立場も認めるといった精神です。宗教が猛威を振るっている地域では、こういう相対主義は発達しません。そのために、宗教戦争が生じ、テロが生じるのです。
- * 日本における相対主義の端的な表現は福沢諭吉の次の文章に見つかります。現代語訳して示

します。「宗教とは一筋に死後の冥福を祈ることだと思われているが、これは大きな心得違いである。世界中に宗教の数は多い。教える内容はさまざまであるが、要するに安心の境地を求める点では一致している。仏教にしろ儒教にしろ、結局は同じものを目指す。それなのに、仏教徒は儒教を非難し、儒者は仏教を攻撃する。いずれも自分勝手と言わねばならない。大和魂というものも、これも一種の宗教で、一筋に誠実をきわめることで満足しようとするものである。これらはいずれも物欲から起こったものでないだけに、えてして自分の宗教に凝り固まるものである。であるがゆえに、他宗教を非難し、ひどいときにはそれに端を発して喧嘩口論、戦争にまで至るのである。本当に恥ずかしいかぎりである。文明の君子になりたいと思う人は、だからこういう宗教を離れ、世界を広く眺めわたし、世界万国の事情に通じ、世界の理は多数決であることを受け入れて、狭苦しい自分の我を張り通さないでほしいものである。仮にも宗教というものが必要ならば、それは国際法・世界普遍の法則というものでなくてはならない。」(「或云隨筆」1865)

- * 啓蒙思想の本家本元はフランスの18世紀ですが、その代表的人物の一人ヴォルテールの次の言葉も「相対主義」に発して「寛容」を訴えるものです。

「同じキリスト教徒どうしが互いを許し合うべきだというようなことは、だれもが常識で分かるはずである。私はその程度では満足しない。すべての人間は、たとえ宗教が異なろうとも、みな兄弟なのだということまで行かねばならない。え、何だって？あの憎たらしい中国人を兄弟と思えだって？ユダヤ人を弟と思えだって？そうなんです。だって、人間は神様がお造りになったって、聖書にも書いてある。みんな同じ親から生まれた子ではないか！」

(「寛容論」1763)

こうして見ると、啓蒙思想というものは単に現代世界の「常識」といった安価なものではなく、実は深い、立派な思想であることがわかります。

- * 主体性の確立ということも、近代人の大目標です。福沢諭吉は有名な「学問ノススメ」で次のように言いました。現代語訳で示します。

「天は人の上に人を造らず。人の下に人を造らずとは言うけれども、実際に世の中が不平等なのはなぜか。学問のあるなしがその原因である。・学問は何のためか。人の前で偉ぶるためではない。我とわが身を独立させるためなのである。学問のないものは他人に、強いものに隷従する。学問をすることで、人は自分で世の中を判断できるようになる。これが独立の意味である。国民の一人ひとりが独立しないかぎり、国の独立もありえない。」(「学問のすすめ」1871-74)

つまり、自律的な精神を持ち、主体性を確立することが求められているわけで、福沢はそのためにこそ「学問」が必要だと説いたのです。

- * こうした啓蒙の精神をもっとも総合的に表現したのはドイツ人のカントです。彼は「啓蒙」を次のように定義しています。

「啓蒙とは自分自身の理性を用いて自身のこと、世の中のことを判断できる状態を言う。理解せずに他人の教えに従うこと、理解せずに知識を詰め込むこと、これは啓蒙に反する。世の掟や国王の命令に従うときも、これを納得して受け入れて従う場合にのみ価値がある。啓蒙された人間は、不合理なこと、不等なことの前で口をつぐむことはしないが、かといって反逆的にはならない。なぜなら反逆は理性の行使の拒否だからである。」(「啓蒙とはなにか」1784)

現代の我々の、いったい何人が、こうした精神の自立性を確保できているでしょうか。

3 啓蒙に対する批判

- * 以上、近代精神の核である啓蒙思想を紹介してきましたが、こういう考え方のどこが悪いのか、わかりづらいと思います。主体性を確立し、他人の立場をも尊重し、なにごとにも理知に基づいて判断する。そのどこが悪いのでしょうか。近代の思想史は一面でこの啓蒙をどう継承していくかという問題をめぐって展開してきました。なかには啓蒙思想を全面否定する人もいますが、そうでなくても、それを批判して、修正しようという考え方が見られます。一体、彼らは啓蒙思想の何に不足を唱えたのでしょうか。いまここに、それらをタイプ分けして紹介しますので、じっくり考えてみて下さい。
- * 啓蒙への批判としてまず見受けられるのは、言ってみれば「自然主義」による批判です。「自然」を絶対的な基準として見、そこから啓蒙的な理性の限界を指摘するのです。そうした批判はすでに合理主義の元祖デカルトの同時代にあらわれています。スピノザの哲学はデカルトを継承しつつ、それを乗り越えようというもので、彼の主著「エチカ(倫理学)」にあらわれた考え方を要約すると、以下のようになります。

「神は自然である。自然以外に神はない。自然の理は人間の理知によってははかりしれない。人間は初め欲望の生き物であり、少し進化して理知の動物となる。しかし、理知を越えた叡知に達しなければ、神を知ることはできない。」

(「^{エチカ}倫理学」1675)

つまり、人間の知性は限られていて、その人間は「自然」という神の中に含まれているという考えです。実際問題、私たちの思考にせよ行動にせよ、自然界の現象の一部であり、決してそれを超えることはないと思われまので、これは従来 of キリスト教の考えとも抵触しますが、当然ながら理性万能主義の啓蒙思想への批判ともなっているのです。

ちなみに、スピノザは人間を欲望と感覚で生きるレベル、理知に目覚めるレベル、神を知る深い智慧に目覚めるレベル、という風に段階的に人間の発達を説明しています。彼にとって、第三の智慧のレベル(これを東洋風に「悟り」と言ってもいいでしょう)に到達することが望ましいのであって、それゆえ啓蒙的な理知では満足できなかったのです。

日本でも「自然」を重んじる立場から理知を批判している人がいます。18世紀の本居宣長がその一人で、彼は古代の神々の世界を理想とし、神代がもっとも自然な、もっとも美しい状態だと考えたのです。そういう点から、彼は後代の日本人が中国の風を取り入れて「思想的になり、理知的になり、賢くなったつもりで愚かになった、と激しく批判します。彼の理性批判は、同時に中国文明批判であり、文明批判という点ではヨーロッパのルソーなどと似ていますが、著しくナショナリスティックであったところが特徴です。その彼の考えを要約します。

「中国人の考えは、これは正しくあれは間違いである、これは善であれば悪だという決めつけから出来ている。我々の先祖の宗教は神ながらの道であり、そこにはさかしらな道理などなかった。すべてありのままに振る舞って、それでよかったのだ。日本人が墮落したのは、最初から墮落しきっている中国人の理の思想を取り入れたからだ。道徳の説が道徳の廃れたところにしか生れないことは、中国人でもわかっていたことだ(=老子の「大道すたれて仁義あり」を指す)。」

(本居宣長「源氏物語玉の小櫛」1796)

* 社会主義による批判

現代はソビエト連邦が崩壊し、東欧の社会主義圏は消え去り、また中国も共産主義から資本主義へと移行しているので、もう社会主義なんか時代遅れだという風に見えるかも知れませんが、私個人は社会主義の思想、というよりもっと正確にはその元祖であったマルクスの思想は、これからの世界をも照らし出すすぐれた面を持っていると思うので、その彼の啓蒙批判を紹介したいと思います。彼の発想そのものが面白いし、参考になると思います。

「ヨーロッパに啓蒙思想が生れた時代とは、ヨーロッパが世界征服を企てた資本主義の確立期と重なる。このことを見るかぎり、啓蒙思想とは、社会の一部の人が巨利をわが物とするのに都合の良い思想だということがわかる。啓蒙の偽善的な点とは、一見すると社会全体をよくする思想に見えるところにある。実際には有産階級の権利を守る思想であって、この思想によってかえって圧迫される貧者・弱者が増大するのである。」

(マルクス「経済学哲学草稿」1844)

彼の考え方を端的に示すこの一節は、啓蒙と資本主義の結びつきを見抜いた点で優れています。今日アメリカは同じ啓蒙思想を掲げ、すなわち啓蒙の産物である「自由」「平等」などの理念を掲げ、それを世界中に普及させるのだという口実で自己拡大をはかっていますが、こうした動きもマルクスの言にぴったり当てはまるのです。

* 精神分析による批判

マルクスとは違う立場ですが、精神分析の元祖フロイトもまた啓蒙に発する近代文明が人間の不幸を増大させていることを指摘しています。フロイトの思想は日に日に精神的な病におかされていることが顕著になってきている現代日本人には今後重要となってくるでしょう。その彼の考えを要約します。

「文明の発達とは人間を不幸にせざるをえない。本来の健全な欲望の発達が抑えられ、それにかわって文化が発達するが、これは本質的な不幸である。不満は蓄積し、それが奇怪な狂信的イデオロギーを生み、人々はそれに飛びつく。その結果、互いを殺戮することになり、幸福からますます遠のくのである。理性を投げ捨ててはならないが、それよりも重要なのは、人間が動物状態を決して脱することはないという事実を受け入れる態度である。これを直視しないかぎり、人間は不幸な動物でありつづける。」(フロイト「幻想の未来」1927)

* 仏教による批判

最後に、在来の宗教からも啓蒙への警鐘が鳴らされていることを指摘しておきます。

「現代の人間は人権とか自由とか言うが、その内容がわかっているか。権利とか義務とか言うが、いずれも我意にほかならない。では自分を殺して、世のために生きるか。これも本意ではない。本意は靈性に目覚めることで、仏教ではそれを悟りというのだ。我意を離れ、世の中をも超える。人間の理知など、とうてい人間を自由にしないものだ。」(鈴木大拙「日本の靈性」1944)

これはアメリカに全仏教を紹介した鈴木大拙が戦争中昭和天皇に読んでもらいたいと思って書いたという書物の一部ですが、大拙が求めた理想は、日本人が近代化の過程で見失った仏教的伝統の回復です。彼によれば、近代的ないかなる理知もはかない、低次元のものであり、

人間本来の靈性へのめざめを遅らせるものだったのです。

似たような批判はキリスト教の側からも出されています。大拙と同時代のフランスのユダヤ人、シモーヌ・ヴェイクはルノー自動車工場で工員として働いた経験から、現代人が「詩情」を失うことで生きる意味を喪失していると感じ取り、そこから始まって現代世界の基本的原理である啓蒙に対しても疑問を抱きました。そういう彼女の著作のなかにいくつかの重要な言葉が見つかります。

「私たちは権利を主張することを教えられてきましたが、根本的に間違っていると思う。権利をではなく、義務をまず教えられるべきなのです。何をしては良いかではなく、何をしてはいけないか、それをまず学ぶべきなのです。」

(ヴェイク「根づくこと」1942)

「人権」「権利」「自由」などいずれも啓蒙の産物ですが、ヴェイクはそれらをいちいち批判して、人間本来の道は人々とともに生きること、「詩情」を回復することであると言っています。キリスト教を「詩の回復」と結びつけたところが極めて独創的ではないでしょうか。

4 結論

* 啓蒙を踏まえての伝統の自覚

以上、ながながとさまざまな事例を挙げてきましたが、私の目的は啓蒙を批判しることではありません。啓蒙はすぐれた思想であり、これなくして私たちは生きていけないと思います。ただし、啓蒙思想がすべてかと言われれば、不足な点はあるのだということも言いたかったのです。今日私たちが生きていくうえで、やはり啓蒙思想を無視は出来ないし、むしろそれを徹底させる必要があります。しかし、啓蒙が絶対ではないと考えることこそが、ほかならぬ啓蒙的態度なのだという風に自覚すべきでしょう。そして、そういう立場から、近代化によって失われた、あるいは忘れ去られた価値ある伝統的な思想をも回復させなくてはなりません。伝統に帰るためではなく(そんなことはしようとして出来るものではない)、伝統を近代の中で持続させ、それによって近代を是正するためなのです。

* コミュニケーション重視

また、私個人の立場を言うならば、一つの立場に固執することなく、ひろく他人の声に耳を傾け、率直に意見を言いあえる関係を築くこと、これこそがこれからの世界では最も重要なのではないかと、ということです。すなわち、私はコミュニケーションこそがもっとも大切にすべきものであり、これなくしてはどんなに崇高な思想も危険なものになってしまうと考えるのです。そういう点では、私は哲学者のポPPER、ハーバマスらに近い立場です。プロ野球の例を見てもわかるように、相互理解を生むには話しあうことしかなく、一方が話し合いを拒絶すれば好ましからぬ結果が生じるのです。

では、どうやればコミュニケーションが円滑になるのか。最初はどうもいきませんが、たゆまずコミュニケーションの道を探ることです。それしかありません。最近の子供はキレやすいなどと言われますが、キレるとはコミュニケーションを断絶することです。そうなってしまうということは、大人がそれまでにコミュニケーションの道をつくってあげていなかったからです。家庭での教育は勿論ですが、世の親の全てがよい親でない以上、学校の教師の責任は重大でしょう。